

この稿をキーボードで叩いている今、3.11 東日本大震災から1カ月である。この小文をご覧になる頃には、復興に向けての槌音が聞こえているといいと思う。巨大地震、大津波、原発事故、死者行方不明者数3万に近く、20万戸を超える建物被害。言葉に尽くせない甚大な災害、被害である。1日も早い原発事故の終息、災害からの復旧、復興を願わずにはいられない。

それにしても、なんとも口惜しい新聞や週刊誌の記事。『原発事故は日本の技術力への信頼を大きく傷つけた。東京電力の手に負えなくなった現場では米軍の無人放水車や無人偵察機が活躍する。日本が掲げてきたロボット大国の看板もすっかり色あせた(4月4日付け日本経済新聞)』あるいは、『「ロボット大国」の名が泣く原発作業は米欧頼み(週刊新潮4月14日号)』、そのほかにも同様の記事がある。

「ロボット大国の看板もすっかり色あせた」とか、「ロボット大国の名が泣く」などと言われるのは心外である。そう思うのは筆者だけではないであろう。産業用ロボットは生産システムに組み込まれ生産性向上になくはならない存在になってすでに久しい。器用にダンスを踊る人型ロボット「アシモ」、愛知万博でトランペットを演奏し、バイオリンを弾くロボットも開発されてきた。ロボカップのサッカーロボット、また、NHK世界ロボコン大会で活躍する学生たち。断じて我が国のロボット技術が色あせたなどということはない。世界に誇ることができると思う。

しかるにどうして新聞記事のようなことになるのだろう。

原発災害用ロボットを開発し、操縦訓練をして、危機に対処できる体制を作ってきていけば、もっと迅速に危機対応ができていたと思う。地震の直後に原子炉は緊急停止した。水素爆発するまでには時間はあった。ただちにロボットを出動させ、状況を正確に把握できたのではないか。無人ヘリコプターを飛ばし自動的に原子炉や建物周辺の様子はずぐにで

も分かったのではないか(東京電力は4月9日になってやっと、10日以降に無人ヘリコプターを飛ばし、カメラを搭載し撮影した映像を使い今後の対策に役立てる、と発表した)。原発災害用ロボットの開発研究がなかったわけではない。東海村の核燃料加工会社のJCOでの臨界事故の後でその開発研究が開始されたが、原発安全神話のもと、中止になったままだったという。

明確な目標が定められれば、必ずや実現できたと思う。設計図はある、原子力発電所は目の前にある、

[シニアコラム]

IT好き放題



[No.5]

## 科学者・技術者の社会的責任

そのシステム、構造は分かっている。そこで起こるかもしれない事故をどこまで想定するか、それらの事故に対してどのように対処するのか、そのために必要なものは何か、何をすればよいのか、目標とそれを実現する意志が明確にできたはずであり、それが示されれば必ずできたと思う。

ここで終われば、それは他人事になる。言ってくればできる、決めてくれればやるというだけでは足りない。それが必要であり、実現しなければならないものであるなら、そのことを世の中に説明しなければならない。科学者、技術者は、その責任を負っている。正確に事実を伝え、必要なことは必要との理解を得ることが大切である。この点は反省させられる点ではないか。学会もまたその責任を負っていると思う。我が国の学会は、学術的活動に重点を置きすぎているきらいがある。社会に対して、巨大化した科学技術に関する情報を、時にはその危険性とそれへの対策について正確に伝える責務もある。これまでもそのように言われてきたが、改めてそう思う。

事ここに至った理由や原因は政治や社会システムやほかにもあると思う。しかし現代社会は科学技術を基盤に成り立っていることを思えば、科学者、技術者が科学・技術について世の人々に正確に伝え、発言することの重要性とその責任を思わずにはいられない。このシニアコラム IT好き放題の稿もその自覚・実践の第一歩と思う。

(平成23年4月11日受付)

稲垣康善

Yasuyoshi INAGAKI

(豊橋技術科学大学)

[名誉会員] inagaki@tut.ac.jp

名古屋大学工学部卒業、同工学研究科博士課程修了、工学博士。名古屋大学教授を経て現在、豊橋技術科学大学 理事・副学長。この間名古屋大学工学研究科長、工学部長を務める。オートマトンと言語理論、プログラムの形式的仕様記述・検証、自然言語処理理論など情報処理基礎理論の研究に従事。